

書評

覗いてみたい!? 先輩OTの頭の中 臨床のリアルに触れる

澤田 辰徳(著)

B5判・154頁

定価：3,080円(本体2,800円+税10%)

三輪書店刊、2023年

作業療法愛にあふれる 臨床ガイド新形態

[評者] 高橋哲也 順天堂大学保健医療学部



「先輩OTの頭の中」というタイトルから、後輩作業療法士に向けた指南書と思いきや、リハビリテーション業界全体を鼓舞するエールでもあることに気づく。

「澤田辰徳」といえば、若くして技士長や学会理事長、大学教授となった作業療法業界のビッグネームであるが、いかに成功してきたかをかっこよく論述しているのではなく、成功の10倍は失敗していることを曝け出している。自虐的にも見えるこの論述手法は、著者と読者の距離をぐっと近づけ、失敗が人間を成長させること、そして大切なのは失敗から学ぶことであると説いている。

成長編、臨床編、教育編、管理編の4編16章で構成されるこの本には、「あるある、こういうことあるよね」、「こういう人いるよね」、「こうありがたいよね」と、いくつも共感できるところがある。きわめて実用的な本で、D・カーネギーの

『道は開ける』にも似た快感すら覚える。

特に成長編、臨床編では、「憧れの先輩の背中を見て育つ」的な内容に満たされており、エビデンスうんぬんの専門書や高いインパクトファクターの科学論文を解説するよりも、難渋する症例の作業療法をどう考えて、どう推論し、どう実践すればよいのかを示す最高の手引書となっている。

臨床編では患者に寄り添う本当の意味や、患者と協働することの重要性を、臨場感一杯のエピソードとともに温かく解説している。これを読んで胸が熱くならない人がいるのだろうか。作業療法の本質は何なのかを教えてくれ、作業療法士のあるべき姿が熱く解説されている。

そして、教育編、管理編と読み進めると、さとり世代やZ世代の教育や、診療報酬や介護報酬に支配される臨床現場、多様性の

時代の管理の難しさなど、まさに先輩OTの頭を悩ませているリアルな問題が登場する。そこにも筆者の歴史や経験をもとに解決策を提案していると同時に、「金の卵」と言われた先輩OTたちに対しても大胆な提案をして、リハビリテーション業界全体を鼓舞している。

表紙のイラストにあえてカクカクした粗いドットグラフィックを採用したのはなんとなく味わい深く、柔軟な発想を基礎とする作業療法士の特徴をよく表現している。聞けば中学生のお嬢さんの作とのこと。「人-作業-環境」を大事にする著者の温かさが伝わってくる。

本書は著者の人生そのものであり、作業療法愛に溢れた内容である。新人、若手、中堅、先輩を問わず、ぜひ、本書を手にとり、澤田氏の頭の中を覗いていただきたい。